

能登半島周辺におけるマダラ成魚の移動 (要旨)

南 卓志・金丸 信一 (日本海区水産研究所)

梨田 一也 (南西海区水産研究所高知庁舎)

日本海のマダラの産卵場のうち最も南に位置する能登半島周辺において、親魚の移動状況を調べるために、産卵場近傍において漁獲されたマダラ親魚に標識を付け、1992年に48尾、1994年に35尾、1995年に31尾、1996年に16尾を各年の2月に七尾湾で放流した。放流された親魚は3月までに放流点近傍で再捕されたほか、その後は沖合で再捕された。それらの情報から、放流後はしばらく浅海域に滞留した後、等深線上を北北東に向かい沖合に移動することが推測された。1994年に放流された親魚のうちの1尾、1995年に放流された親魚のうちの2尾が翌年の産卵期に放流点付近で再捕された。このことから、マダラ親魚の産卵場への回帰性が示唆された。

本研究の結果については、農林水産技術会議特別研究「中回遊型魚類の回帰特性と産卵場形成要因の解明」の報告書として刊行されるほか、別途発表の予定。